

【Report】

ヴォーチェ弦楽四重奏団、ウィグモアホール・デビュー！！

フランスのヴォーチェ弦楽四重奏団が7月26日、ロンドンの名門ウィグモアホールにデビューした。毎週日曜日の午前11時半から1時間ほど行われる超人気の室内楽シリーズ、「サンデー・モーニング・コーヒー・コンサート」に招かれたのだ。パリやフランス内外で活躍しているが、ロンドンではヨーロッパ・コンサート・ホール協会(ECHO)から2013-14年の「ライジング・スター」に選ばれてバービカンホールで演奏したぐらいで、まだまだ‘未開の土地’である。

ランチ前のひと時、1時間余りの短いコンサートはベートーヴェンの弦楽四重奏曲第11番「セリオソ」で始まった。20分強の短い曲に濃縮されたテンションの極みを声高く歌い上げ、その声は4人が一つのものとして響き渡る。その名もヴォーチェ(イタリア語で‘声’)なのだから！続くシューベルトの長大な弦楽四重奏曲第15番では、地味であり聞き慣れない音楽を奥深く斬新な境地へと展開させて観衆をアツといわせ、一瞬沈黙の後に万雷の拍手を贈られた。そしてどこか茶目っ気のある人たち。アンコールにバルトークの第4番から第4楽章アレグロ・ピッツィカートを取り上げ、全員が弦をはじくのがユーモラスで、客席からクスツと笑いがもれたほどだった。

1901年創立のウィグモアホールはドイツのピアノ・メーカー、ベヒシュタイン社のホールとして発足したのが前身だが、第一次世界大戦を機に敵国ドイツと縁を切って英国企業が買い取り、1916年に住所であるウィグモア・ストリートの名を取って再出発した。第二次大戦中にはブリテンが多くの作品を初演している。ルービンシュタイン、デュ・プレやアマデウス弦楽四重奏団ともなじみが深く、室内楽、独奏、リート等声楽の殿堂となった。日本人音楽家では内田光子、今井信子等の大物が並ぶ。昼間の短いコンサートは、世界に羽ばたく若い音楽家の登竜門になっている。



コンサート後のバックステージで

秋島百合子(ロンドン在/ジャーナリスト)

July 30, 2015